

1 研究主題

学びに向かう力を育む音楽科の授業を目指して

2 はじめに

本研究会ではこれまで、仲間と共に表現や鑑賞をする楽しさを体験させる「学び合い」に重点を置いた研究に取り組んできた。昨年度の研究では、より主体的・対話的で深い学びを目指し、「学びに向かう力」を育むことに着目した授業づくりを行った。その結果、授業で得た学びを、次時の学習や生活に生かそうとする児童生徒の姿が多く見られ、一定の成果を感じることができた。

今年度も、引き続き「学びに向かう力」を育むことをテーマとして研究を行うこととした。児童生徒が主体的にふり返りを生かして、単元や領域のつながりを意識し、自ら課題を見つけ深めることで、より「学びに向かう力」がつくと考えた。

3 研究経過

小学校低学年部会、小学校中学年部会、小学校高学年部会、中学校部会の4つの分科会に分かれて、実践報告・協議を行った。実践報告では、疑問や意見を交流し、教員一人一人の指導力の向上につなげていった。

また、合唱の実技研修として「変わらないもの」と「春に」の2曲を練習し、11月に行われた小中学校音楽会で演奏を披露した。

4 研究の概要

授業実践を進める中で、表現・創作領域と鑑賞領域の学びを、児童生徒が結びつけられるような手立てを講じ、ふり返りを主体的に生かす研究を行った。その中から、2つの実践を報告する。

(1) 実践例

单元名 『和音や低音のはたらき』 小学校5年生

①『茶色の小びん』『和音のはたらきを感じ取ろう』『こきょうの人々』

(表現・鑑賞)

主旋律と低音・和音の重なりを聴き取ったり演奏したりしながら、低音・和音の役割や関わりを感じ取ることが目標に実践を行った。グループで和音のひびきに合わせ、体を動かしたり、絵や色で表したりし、和音のひびきや役割を感じ取った。表現活動では、パートを決める際に前時のふり返りを参考にしよう声かけしたことで、各パートの良さや役割を考えながら人数や楽器を決め、自分たちでバランスを工夫しながら練習・演奏することができた。

②『和音に合わせてせんりつをつくろう』（創作）

和音に合わせて、まとまりを考えながら旋律を作ること为目标に実践を行った。創作途中で、「どのようにすればまとまりが出るのか分からない」という意見が出たので、①の自分のふり返しを見直しながら旋律を作るよう促した。『和音のはたらき』で学んだそれぞれの和音の特性や、旋律の動きを意識して、自分の意図や思いに合った旋律を作ろうと意欲的に取り組む姿が見られた。



(2) 実践

单元名 『イメージと音楽との関わりを感じ取ろう』中学校1年生

①『ジョーズのテーマ』（鑑賞）

曲を聴いて頭の中に浮かぶイメージについてなぜそう感じるのかを探り、言葉に表すことを目標に実践を行った。グループで仲間とともに感じた印象を深く探ることで、理由を言葉に表すことができた。また、ピンポン玉を活用し音を可視化することで、他の児童生徒の気づきから音楽の要素の働きに迫るような紹介文を書くことができた。

②『ジョイフルコンビネーション』（創作）

ボディパーカッションをグループごとに工夫して発表することを目標に実践を行った。これまでであれば、強弱や速度の変化をつける程度だったが、『ジョーズのテーマ』で音楽の要素を丁寧に捉えさせ、ふり返りに個々の学びを記録させたことによって、音の重なりを意識したり、手拍子の音色を変えたりなど、新たな工夫をするグループが多くみられた。

5 今後の課題

部員の実践報告では、児童生徒が自分のふり返しを見直し再考する時間を設けることで、表現・創作領域と鑑賞領域を往還した学びを実現し、それぞれの領域で感じたことを生かしていこうとする様子が報告された。

しかし課題として、教師側の声かけに応じてふり返しを生かしている状況があり、自ら主体的に学びをふり返ることが十分にはできていない様子が見られた。

児童生徒自身が「習ったことを活用することでこの課題もできるようになる」という意識をもち、主体的に自分の学びを生かそうとすることで「学びに向かう力」が高まると考える。これらを解決するため、単元や領域同士をよりつなげていけるように、教材研究をし、授業づくりを工夫していきたい。さらに、児童生徒が自分の学びを価値あるものだと思うことができるような教師側の声かけを継続的に行っていく必要があると感じた。今後も、学びに向かう力を育む研究を継続し、児童生徒の音楽を愛好する心情を培っていきたい。